



令和4（2022）年度「不登校を考える学習会」（第3回）を行いました。

2023. 1.28(土) 小郡市人権教育啓発センター

演題：子どもに寄り添う伴走型支援 ～ ソーシャルワークの視点から ～

講師：福岡県立大学 人間社会学部 准教授

おくむら けんいち
奥村 賢一 さん



今回の学習会は、福岡県初のスクールソーシャルワーカーの奥村賢一さんを講師に迎え、56名という多くの方の参加のもと、学習会を行うことができました。

奥村さんは、「支援は『始縁』」「人とのつながりは財産」と語られるように、多くの保護者や子どもとの出会いを大切にしてくださいました。その出会いの中で感じたことや、理論と具体的な保護者や子どもの姿をつなげながらお話しいただきました。

また、福岡県立大学 不登校・ひきこもりサポートセンターの取り組みについてもお話しいただきました。

学習会の内容を以下に記します。

○ 「共感」とは感情を共有すること — 行為の背景にある一次感情に目を向けて

私たちは、耳からの情報（言語）より目からの情報をはるかに多く受け取ります。したがって、子どもの泣く・叫ぶ・暴れる・逃げるなど発散型・爆発型の二次感情といわれるものに目を奪われます。子どもに寄り添う支援を行うには、二次感情よりもその根っこにある不安・不満・恥・くやしき・失望・葛藤などの一次感情に目を向けることが大切です。例えば、「あなたは○○だと思うくらい、□□をしている（言っている）んだね。」などの言葉で、「共感」つまり 気持ちを理性的に理解し、相手の気持ちを言語化することが大切です。（ただし、感情移入しすぎると共倒れになるので、注意してください。）

○ 対話を広げる疑問詞の活用 — 「Why（なぜ）」以外の5W1Hを活用して

例えば、子どもに対して「なぜ学校に行かないの?」「なぜ忘れたの?」と「なぜ(Why)」を使うと、「あなたに責任があるんだよ」という原因追求のメッセージになってしまいます。ものごとを因果関係で結ぶのではなく、他の疑問詞「どのように(How)」「いつ(When)」「誰と(Who)」「どこで(Where)」「何を(What)」や「誰と(With)」を効果的に使うと、ものごとの背景を捉えることもでき、対話が広がります。

○ 適応できないこと＝発達障がいではない — 安易にカテゴリーに分けない

最近、発達障がいという言葉がよく使われますが、子どもの生育過程や養育環境などを知ることなしに安易に医学的診断を下すことで子どもや保護者を傷つけることがあります。海外ではインクルーシブ教育を重視しており、発達特性に関係なくすべての子ども達が同じ環境で教育を受ける機会が保障されています。

カナダのトロントでは、保護者が子育てのことなどを気軽に相談できるペアレンティングセンターが設置されている学校もあります。また、学級内には教員1名以外にも福祉や心理の専門職も配置され、チームで学級運営を行っている学校もあります。

近年、二次障害を抱える子どもが増えているのは、コミュニケーションの困難性や周囲の無理解・叱責などにより、自尊心の低下や自己否定感が高まることで、鬱や情緒不安を招いていることが多いと考えられます。大人は子どもの基本的信頼感を得ることを大切にしたいものです。そのためには、「受容」「傾聴」「共感」の「聴き方の三原則」が大切です。具体的には、(特に信頼関係ができていないうちは)聴き手の評価を挟まない、相手の話を遮ることなく話を最後まで聴く(特に専門職の人ほど意識したい)、何分時間がとれるかは先に言うておくなどです。子どもと一緒に遊ぶ(ゲームする・見学する・食べに行く)ことも有効です。



【次のページに続きます】

○ 福岡県立大学で行っている支援

福岡県立大学では、「不登校・ひきこもりサポートセンター」という専門的な支援を行う機関があります。また、学生も支援に関わっています。スクールソーシャルワーカーなどの専門職をめざす学生が、発達特性のある子どもに寄り添いながら、サポートプログラムを考えたというお話もありました。また、学生の中には小中学生のとき不登校だった人もいて、過去を振り返るとき「そういう私を、親も先生も認めてくれたことが支えになった」と話していることから、受容や信頼が大切であると感じます。

○ 参加者の質問より

講演の後、参加者からは様々な質問がありました。

- ・「(支援者の立場として) 不登校などの相談を受けたいとき、どうすればいいですか？」
→ まずは相談者のストレスを緩和する(一人にしない)ことを大切にしたい。相談者のできていることを認めましょう。(相談に来たこともできていることです。)また、支援ができる機関や窓口を紹介するときにも、「こういう所がありますよ」で終わらず、「こういう所があるから一緒に行きましょう」というように伴走を意識した声かけを行うと良いです。
- ・「不登校などの相談をどこにすればいい？」
→ 特定の意見のみを参考にせず、複数の選択肢を用意することを心掛け、最後は自分で決めるようにしたい。「ここじゃないとダメ」と決めつけるのではなく、「ここに相談してダメなら他へ」という考え方が良いでしょう。
- ・「家でずっと寝ているのだけれど…」
→ それだけ、心の傷が深かったのだと思います。

参加者アンケートより

- 愛着形成のために、自分の立場でできることがあると、展望が持てました。「支援は始縁」「父性的・母性的な関わり方」「必要なのは伴走者」などの多くの言葉・関わり方のヒントをもらえました。大変勉強になりました。
- 具体的なアドバイスをユーモアを交えながらやさしく説明してくださり、ありがとうございました。参加してよかったです。スクールソーシャルワーカーの仕事は素敵なお仕事だと思いました。私の友人も海外で不登校の子の保護者と学校の間で立ってサポートする仕事をしています。日本でもこのような仕事の認知度が上がり、なる人が増えてほしいです。(税金を投入して支えてほしいと思います。)
- 現在、学童の支援員をしながら、民生児童委員をしております。自分が子どもたちと関わる上で、自己流ではなく、より良い関係を築いていくために、本日出席して良かったと思いました。
- 学校は、支援員さんやスクールソーシャルワーカーの方などに本当に支えてもらっていると感謝です。学校にも安全基地(安心できる場所)が必要だと思います。学校・学級復帰ばかりをめざす考えがまだまだあるので、必ずしもそうではないということを発信していけたらと思います。
- 学校の先生の知識や考えによって、子どもへの対応がまったく違うので、診断がなくても理解・対応が求められるようになってほしいと思います。学校がすべてではないとはわかっていますが、子どもにとっての学校の存在は大きいです。今は、さまざまな資源を使って、いろいろな人に助けられて、これから少しでも良い方向に行けたらなと思っています。
- 民生委員をしています。今、保護者や子どもの訪問をさせていただいて、保護者の伴走をしていきたいと思いました。「伴走」良い言葉ですね。
- 楽しくお話を聴けました。また、ぜひ話を聴きたいです。否定しない、「なぜ？」を言わないようにしたいと思っています。これからも学びをしていきたいと思っています。

